研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	ターミナル期にある小児がんの子どもの意思決定を支援する看護師の 倫理的苦悩の意味づけに関する質的研究				
研究組織	代　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	丸山　始美
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山下　早苗
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	丸山　始美

講演題目

ターミナル期にある小児がんの子どもの意思決定を支援する看護師の
倫理的苦悩の意味づけに関する質的研究

研究の目的、成果及び今後の展望

【目的】

小児医療現場では子どもの養育権をもつ親が意思決定することが多い現状があるため、子ども参加型の意思決定を行うことが難しく、看護師は倫理的苦悩を抱く状況に陥りやすい。倫理的苦悩を抱え続けている看護師は疲弊し、バーンアウトすることが危惧される。そこで、本研究はターミナル期にある小児がんの子どもの意思決定を支援する看護師が倫理的苦悩の体験をどのように意味づけしているのかを明らかにし、看護師がつらい苦しい状況において道徳的レジリエンスを発揮するための一助とすることを目的とした。

【方法】

ターミナル期の小児がんの子どもの意思決定支援を行った経験があり、倫理的苦悩を抱いたことがある看護師2名を対象とし、半構造化面接を行った。分析は、ナラティヴ研究法におけるテーマ分析と構造分析を行った。テーマ分析では「語られた内容」を探究し、構造分析では語るという行為に着目し「語りの構造と特徴」について分析を行った。

また、静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認（3-23）を得て実施した。

【結果および今後の展望】

看護師の倫理的苦悩の意味づけの語りには、「倫理的苦悩が生じた状況」「倫理的苦悩の内容」「看護師の行動の展開」「評価、倫理的苦悩の体験の受け止め方」「結果」「倫理的苦悩の体験の意味づけ」の6つの語りの構造が示された。看護師は*「良かれと思って企画したことが良かったのかどうか悩ん」*でおり、*「1例たりともターミナルケアを良かったと思うことない」*と捉えていた。*「(子どもにとって）特別なことよりも、普通の日常生活が続いていくことが幸せなのかな」*と語っており、ターミナル期における子どもの希望をできるだけ叶えられるように特別なことであっても調整したいという気持ちとは反対に、特別なことよりも子どもが家族との日常生活が送れるように調整することの方が子どもにとって必要なケアなのではないかとターミナルケアについて模索していたと考える。また、看護師は倫理的苦悩を抱える経験から、*「自分の看護観が上乗せされて」*いることを実感し、子どもを中心とする看護の在り方を検討していたと考える。

今後の課題は、対象数を増やし、看護師の倫理的苦悩の意味づけについてテーマ分析を行っていくことである。